

マタイの福音書 6 章 5 節から見てまいります。今晚のテーマは『主の祈り』であります。『主の祈り』は 9 節から 13 節でありますけれども、まずは 5 節から祈る前に注意点をイエス・キリストが与えて、警告もされております。『⁵また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。⁶あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。⁷また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。⁸だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(で、9 節に、)⁹だから、こう祈りなさい。(ここからが『主の祈り』です。)¹⁰『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。¹¹私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。¹²私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。¹³私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕と。

『主の祈り』というのは、宗教改革者のマルティン・ルターにとって祈りのすべてであったと言われてます。彼はこう言っています。「いかなる場合にもキリスト者が主の祈りを正しく祈るなら、その祈りは十分以上であると、私は確信する。」この『主の祈り』を正しく祈る、つまり『主の祈り』の内容を正しく理解した上で、主に向かって祈るならば、その祈りは十分以上であると、ルターは確信しておりました。同時にルターはこんなことも言っています。「主の祈りは最大の殉教者だ。」その意味するところは、この『主の祈り』ほど最も多く口で唱えられながらも、最も多く足蹴^{あしげ}にされ、軽んじられ、その生命が殺されてしまっているということでもあります。

大抵の教会に行きますと、日曜日の礼拝には必ず式次第の中に『主の祈り』の朗読というものがプログラムの中に含まれております。他にも『使徒信条』というものもあります。大体聖歌や賛美歌のところに文語訳で載せられているものを皆で朗唱するのが一般的であります。でも、この教会では、『主の祈り』を礼拝プログラムの中ではみんなで一斉に頌栄したりすることはいたしません。それをしてはいけないという意味ではありませんけれども、ただ、今私が引用したルターの言葉を私は強く意識しているからであります。この『主の祈り』を正しく理解していないのに、ただ口先だけで儀式的に、ただプログラムの一つということで「この祈りさえ祈ればもう祈った。」というふうに思ってもらっては困ると私は思っているからです。で、大体日曜日にはクリスチャンだけでなく、クリスチャンじゃない人たちも多く集まりますので、その人たちが祈ってもそれはただの祈禱文に過ぎません。そして彼らが「それをもって祈った。」と思って帰られてしまっは、心外であります。ですから敢えて、これは礼拝プログラムの中では祈らないというふうに決めているわけです。『主の祈り』を最大の殉教者にはしたくないのです。むしろこの『主の祈り』を生かしたいので、まずは正しく理解した上で、今日のこのマタイの 6 章では、その『主の祈り』を私たちは見ることにありますので、これを正しく理解した上で祈るならば、私は大いに奨励して毎回毎回それこそ毎日祈るべきだと思います。私と有希子は毎日『主の祈り』を祈っていますけれども、皆さんにもそのように勧めたいと考えております。

そしてもう一つ、この祈りを見る前に J・I・パッカーという有名なイギリスの神学者であり牧師でもある人が、『主の祈り』についての本を書いているんですが、彼によると『主の祈り』は、祈りのエッセンス

である。』と言われてます。『それは福音の要約である。』とも言われてます。『神学の主要部分であり、目的と祈りの規範であり、生活全体に関わる鍵です。』と。『クリスチャンであることの意味をこれほど端的に表したものは他には例がありません。』と、J・I・パッカーは述べております。私もその言葉に心からアメンと言いたいと思います。

今から見る内容はまさにそれです。祈りのエッセンスそのものです。福音の要約であります。神学の主要部分、そしてクリスチャンであることのすべて、それがすべてここに凝縮されています。こんなにも重要な祈りを、意味も分からずにただ呪文を唱えるようにして、形式的に、機械的に祈るのは、もったいないと思います。むしろ私は、意味が分からないならば祈るべきでないと思えます。ただあまりにも有名な祈りで、クリスチャンでない人たちも聞いたことがあるぐらいです。そしてこの『主の祈り』は、初代教会の中でも重要な位置を占めておりました。古今東西、教団教派の隔たりなく、この『主の祈り』は受け入れられて来ました。カトリックでも祈りますし、またプロテスタントでも祈ります。聖公会でも祈りますし、いろいろな宗派・教派関係なくこの祈りは多くのクリスチャンたちに暗誦され、唱えられてきたものであります。勿論その理由は、聖書に書かれている祈りだからであります。イエス・キリストが弟子たちに『こう祈りなさい。』と教えられた祈りの型、パターン、モデル、模範的な祈りであったからであります。ただもう一度強調しておきたいと思えますけれども、問題点としてはこの『主の祈り』が儀式的な祈禱文に成り下がってしまっているということです。イエスが言われたような『神のことばが空文になってしまっている。』という現象が起きているということです。単に字面を追うだけのお経のような空念仏からねんぶつのように、空に向かって誰に祈っているかも分からず、何を祈っているかも分からず、ただ空念仏のように唱えられているだけ。それで何か祈った気分になって、礼拝プログラムをしっかりと終えられたというそんな達成感・充実感を覚えて帰られてしまっただけは、もったいないと思えますし、神への冒瀆ぼうとくとすら私は思えます。死んだ祈りをささげているに過ぎないからです。

そしてもう一つ前置きとしてチャールズ・E・カウマンという日本に来た宣教師の奥さんで、よくカウマン夫人と言われる人、レテー・カウマンと呼びますけれども、アメリカの在日宣教師です。日本のホーリネス教会の創設者の一人とされる有名な人ですが、そのカウマン夫人が『主の祈り』に関して非常にチャレンジのある言葉を残してくれていますので、それを今皆さんにチャレンジしてから学びに入りたいと思ってます。『主の祈り』の一節一節を思い出して下さい。

『天にまします』とは言えません。私が地上のことだけに気を取られて、天に宝を積んでいなくては。

『我らの』とは言えません。水も漏らさないような霊の密室に閉じこもっていたのでは。

『父よ』とは言えません。日常の生活の中で親子のようなつながりを持っていないのでは。

『御名をあがめさせたまえ』とは言えません。御名にふさわしい者と呼ばれながら聖くなくては。

『御国を来たらせたまえ』とは言えません。力を尽くしてそのために労していなければ。

『天になるごとく、地にも』とは言えません。奉仕のために自分をささげる備えが出来ていなければ。

『みこころをなさせたまえ』とは言えません。みこころを疑ったり反発したり、従わずにいるのでは。

『我らの日用の糧を今日も与えたまえ』とは言えません。過去の経験によって生きていたり、いい加減な生き方をしているのでは。

『我らに罪を犯すものを我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ』とは言えません。だれかを恨んでいるのであれば。

『我らを試みに会わせず』とは言えません。自分から試みの中に入っていこうとしているのでは。

『悪より救いだしたまえ』とは言えません。祈りによって霊の世界の戦いに参加する備えが出来ていなくては。

『国は汝のものなればなり』とは言えません。忠実な民として王と同じ心を持っていないのでは。

『力は汝のものなればなり』とは言えません。人の行動を心配したり、隣人がどのように考えるかを恐れているのでは。

『栄は汝のものなればなり』とは言えません。人々の称賛を自分が求めているのでは。

『限りなく』とは言えません。もし私が時の流れの中だけに目を向けているのでは

このことを皆さんにも考えて頂きながら、自問自答して頂きながら、『主の祈り』の本文に入っていきたいと思えます。この中から祈りの本質を知って頂きたいと思えます。祈りとは何なのか。祈りの目的もそうです。そして祈りの内容、これを『主の祈り』の中から一言一句それぞれ分析しながら、簡単ではありませんけれどもまとめていきたいと思えます。

まず『主の祈り』の前半部分、**9節～10節**。そして後半部分の**11～13節**に大きくアウトラインとして大別される内容となっています。神への呼びかけから始まって、神を礼拝する3つの祈りが先にあって、人間の必要を願い求める3つの祈りが続きます。で、最後はいわゆる頌栄というもので締めくくられております。もちろんこれは文脈を思い出して頂きたいのですが、『山上の説教』の一部であるということでもあります。今までイエス・キリストが『モーセの十戒』なども取り上げて、「昔の人々は」とか、「あなたがたはこのように聞いています」とか、というフレーズを使ってイエスは『モーセの十戒』を呼び起こしながらその『十戒』の真意というもの、本意というものを深く説明されてきたわけであります。それはシナイ山において与えられたものですが、イエスはここで、ガリラヤ湖のその山の上で、丘の上で説教をされているわけです。丁度シナイ山におけるモーセとの対比があって、そしてイエスがその『モーセの律法』を教えながら、同時に『主の祈り』を通して祈りの本質、祈りの真意・本意というものもここで併せて教えようとされています。これはいつか別の機会に深く教えたいと思っておりますけれども、『主の祈り』と『十戒』との深い関係、相関性、関連性、これも非常に意義深い学びになりますので、今日は少しだけそれらも触れていきたいと思っておりますけれども、10の言葉『十戒』と『主の祈り』。これを比較して学ぶのは非常に楽しい学びであります。

で、『私たち』というのが、代名詞として使われております。**9節**以降に『私たち』という言葉が連呼されています。ですからこれは実のところ『主の祈り』と呼ぶよりも、“私たちの祈り”と言われている以上これは“弟子たちの祈り”と呼んだほうが正確であるということです。『主の祈り』というと、主がどのように祈っているかのように思うかもしれませんが、“私たち”というふうに弟子たちが祈ることが出来るように、そして“私たち”は“神の家族の祈り”というふうにも言えるでしょう。ですから、家族で祈るのもいいです。夫婦で祈るのもいいですし、神の家族として教会全体として祈るにふさわしい祈りです。ですから、本来であれば、この『主の祈り』を、若しくは“私たちの祈り”というこの弟子の祈り、これをしっかりと神の家族が理解した上で、皆で心合わせて私たちの父に向かってこの祈りをささげるならば、これほど素晴らしい祈りは他にはないということです。祈りの型ではありますけれども、だからと言って型にはまった祈りをしなければいけないわけではありません。ここでのエッセンスをしっかりと押さえれば、この祈りをあなたは自分の言葉でも祈ることが出来ます。注意点として、先に読んだ**5～8節**の前置きがありました。偽善的な祈りになってはいけない。人目を引くような祈りではいけない。注目の的となるような祈りではいけない。この偽善という罪については先週**1～4節**のところできっとしっかりと私たちは押さえてきたわけですから。“偽善”という言葉は“ヒポクリテース”という言葉で、ギリシャの古典劇の仮面をつけた役者たちのこと、舞台俳優のことをいったと言いました。祈る時に偽善者のように、仮面をかぶった如何にも敬虔に見える信仰者のようにして、芝居じみた祈りをしてはいけないということです。敬虔に見えるように、芝居じみた祈りをしてはいけないということが先ず言われています。だからと言って、人前で祈っ

てはいけないとイエスはそのことを禁じているわけではありません。イエス・キリストご自身も人前でも祈られております。気を付けなくてはいけないことは、“神様と交わる”これが祈りの本質でありますから、人を意識しすぎて、人を感動させるような、人に聞かせるような、人を納得させるような祈りをしてはいけないということです。これは特に人前で祈ることを常としているような牧師やまたリーダーと呼ばれる人たち、奉仕者たちにとっては非常な誘惑でもあるということもお伝えしておきたいと思います。牧師ほど人前で祈る人たちはいないと思いますけれども、この誘惑は特に礼拝メッセージの終わりのほうにやって来ます。終わりのほうにやって来るとするのは、終わりに祈るんですけれども、その祈りが如何にも人に聞かせるような祈りになりがちだということです。メッセージを要約してそのポイントを最後に祈りの中で言うような、そういう人前において聞かせてしまうような祈り。神に対して祈るはずが、いつの間にか人に聞かせるような祈りになってしまう。これは偽善的な祈りになってしまうので、気を付けたいというところでもあります。神様に話しかけているはずなのに、祈りの中に自分の言いたいこと、会衆に押さえてもらいたいそのメッセージのポイントを落とし込むような説教じみた祈り。それはもはや神に話しかけてはいない。人に話しかけている。祈りとも言えないようなものになってしまってます。それは、とすれば偽善的な祈りになりがちですので、私たちも、ここにいる皆さんも気を付けて頂きたいと思います。

で、自分の奥まった部屋に入って祈るという、これは“**密室の祈り**”とよく言われますけれども、これは誤解のないようにして頂きたいんですが、「祈る際には一切人前では祈ってはいけないんだ。」とか、「むしろ密室に入って神と一対一で常に個人的に祈らなければならない。だから教会に皆が集まって祈祷会をするというのは、イエスの教えに反するんだ」と。それは極論であります。実際に初代教会では皆で集まって祈っていました。聖霊が下った時、あのペンテコステの日に聖霊が降臨して、『**聖霊があなたがたの上に臨まれる時、あなたがたは力を受けます。**』というその体験をしたのは、まさに祈祷会の真最中だったわけですから、ここでのポイントは、人前で人に見せるような祈りを避けなさいと。むしろ祈りは神に対するものだから、神と一対一であることを常に意識しなさい。それを助ける上では、人のいないところで、^{ひとけ}人気のないところで祈るのは確かに助けになると思います。私たちには常に誘惑がありますから、人を意識してしまうわけです。ですから部屋の中で一人になれるなら、最適な場所であります。または家で一人になれるければ、一人で祈れるような場所を探すわけです。外に行って、早朝散歩しながら祈るのも一つでしょうし、またトイレの中に閉じこもって祈るのも一つかもしれません。車の中でも祈ることができます。いろんな適用が出来ると思いますから、ポイントは親子水入らずの時を持つ。それが大事だということです。

で、祈りには報いも伴うわけです。ここで2種類の祈りの報いについて見て頂きたいのですが、一つは人から受けるこの世限定の称賛という報いです。人に見せびらかして自分が如何にも信仰熱心であるかのように。人にはまさに祈りの人であるかのような印象付けをする。祈る姿を人に見せたり、自分が何時に起きてどれくらい祈っているとか、そういうことを人に告げたりするわけです。「すごいですね。」とか言われたら、もう終わりですね。それでもう報いは天にはありません。で、もう一つの報いというのは、隠れたところで聴いておられる父なる神からのものです。で、これはこの世限りではなくて、永遠に続く豊かな報いとなります。神はあなたの祈りに応えたいと願っております。あなたを祝福したいと望んでおられます。そして、あなたの願い以上に応えることの出来るお方であります。パウロも「私たちの願いを超えて、思いを超えて、はるかに豊かに備えて下さる、施して下さい方だ。」と神のことを言っておりますが、祈りには必ず報いが伴うということも知って頂きたいと思います。だからこそ祈ることはやめられないわけです。人に称賛を求めた祈りですら報いがあるわけです。でも、人ではなくて神に報いを期待しながら祈る祈りは、どれほど素晴らしいものとなるのか。あなたはどちらの報いを望むのか。人からか、神からか、ということも覚えて頂きたいと思います。

で、もう一つの注意点としては異邦人の祈りと同じではいけないと。異邦人の祈りの特徴は、同じ言葉をただ繰り返す。言葉数が多ければ、つまり長く祈れば神に報いてもらえる。で、同時に長く祈れば自分でも長く祈った感じになりますので、いわゆる達成感が得られる、満足感が得られる。短い祈りだと、なんか祈った気がしない。ダラダラと長い祈りをすれば、「私は祈ったんだ」という一つの実感、達成感、自己満足、それが得られるがゆえにやたらめったら長く祈る。お経のようにただ同じ言葉を繰り返す。でも祈りというものは、時間には左右されないとイエスはここで教えられているわけです。祈りの長さが重要ではないということを説いておられます。実際に祈っている時間がない危機的な状況もあるわけです。そんなときに、もしダラダラと長く祈っていたらどうでしょうか。ペテロが水の上を歩いていただけですけども、風を見て怖くなってイエスから目を離した途端に彼は沈み始めてしまいました。その時に彼がダラダラと長い言葉で祈っていたら、多分そのまま沈んでしまったかもしれませんが、単純に彼はその瞬間、「主よ、助けてください。」と瞬間的に祈ったわけです。で、その祈りに主は応えて下さいました。ですから祈りの長さが重要ではないです。長くやれば応えられる。短くやれば応えられない。そういうことではないということです。よく祈りの中で、同じ言葉を繰り返してしまう、そういう癖を持っている人たちがおります。「主よ、主よ。」とか、「ハレルヤ、ハレルヤ」とか。気を付けたいと思います。祈りを長くするために何も考えずに同じ言葉をそこにつけてしまう。同じ言葉を繰り返す、これは父なる神様と会話をする上では、気を付けなければいけない点であります。知性をもって会話をすべきであります。神様があなたの祈りを聴いているんです。その神に向かって、あなたは同じことを何度も何度も繰り返す。まるで神を馬鹿にしているかのようです。エリヤと対決したバアルの預言者たちの祈りを思い起こします。彼らは何度も何度も同じ言葉を繰り返し、ちっともバアルが応えてくれないのでバアルの預言者たちは、このバアルの注目を惹くために張り叫んでみたり、踊ってみたり、自分の体に傷までもつけて、何としてでもバアルに応えてもらおうと躍起になったわけですけども。そのようなバアルの預言者の姿も忘れてはなりません。

で、言葉数だけでなく、祈りの回数も考えて頂きたいと思います。ここでイエスが教えておられるのは、言葉数が多いというポイントですけども、祈りの回数、これは一体どう捉えたら良いのか。ある人は、同じ事柄を一回以上祈ることは不信仰の現れだと考えます。もう一回祈ったんだから、二回も三回も祈らなくても良いと。一度の祈りの中で同じことを繰り返さないまでも、回数を分けて一日に例えば何回も同じことを祈る。これは一体どういうふうに捉えたら良いのか。勿論節度をもって祈るべきだとは思いますが、同じことを祈ってはいけないとは私は思っておりません。パウロでも同じことを三回祈りましたし、イエス・キリストもあのゲッセマネの園で同じ祈りを三度ささげました。ですから、回数というよりも言葉の数ですね。ただ回数も度が過ぎれば、これは会話ですから、もう鬱陶しいわけです。同じことをいつも繰り返し繰り返し言っているのでは、本当に祈っているのかどうか疑われてしまうわけです。神は私たちが願う前に私たちの必要を知っておられるということ。それが**8節**に書いてあります。『だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。』どういう方に祈っているのか。考えれば分かることです。神はあなたが願う前にあなたのニーズをすべて把握しているわけです。ですから一々細かく今の自分についての状況、それを逐一報告するような必要性は本来無いわけです。よく祈りの中で、まるで神が全く何も見えない、知らない、把握していないかのように、報告するように祈る人がいます。「あの人があの時こういうふうに言って」とか、細かく言うんです。でもそれは他の人にも聞かせるために祈ってるんですという人もいるかもしれませんが、それでは偽善的な祈りになってしまうかもしれないので、気を付けたいと思います。祈る前にそういうことは言うっておけば良いわけです。一緒に祈る人に対してそのことを先に報告した上で祈れば良いわけです。祈りの中でわざわざ報告する必要はありません。情報を提供する必要ない

わけです。勿論中々自分しか知らない話であるならば、他の人はあなたの祈りに賛同して「アーメン」とは言えないかもしれませんが、もし他の人が「アーメン」と言えないのであれば一々祈る必要性すらないわけです。皆に「アーメン」と言って欲しければ、その前に事情を一通り説明した上で、そして神様にはそんな事情を一々報告するような祈りはしないで、そして祈りの重要な部分だけを神様に祈るといふこと、神様に望むといふこと、そこの部分をただ祈れば良いわけです。気を付けたいと思います。これも、ともすれば祈りを長くするための一つのテクニックになってしまいます。

では、何故祈るのか。神様は何もかも最初からご存知であるならば、祈る必要性すら無いのではないかと私たちは考えがちですけれども、祈りというのは自分の求める答えを頂くということではありません。祈りは神との完全な一致をもたらすものです。ウエストミンスター信仰告白というものの中に、『**祈りと神の御意志（みこころ）に一致することのために、キリストの御名によって私たちの罪の告白と神のあわれみへの感謝に満ちたお礼を添えて、神に私たちの願いをささげることです。**』と説明されています。ですから、まず祈りというのは、私たちが神の御意志・みこころと完全に一致することを求める目的で祈られるべきなんです。単純に願掛けをして、私たちが期待するような祈りの答えを得るために祈るんじゃないです。

それら全てを押さえた上で、あらためて**マタイ 6:9**の『**だから、こう祈りなさい。**』というところに戻って欲しいと思います。“だから”大事な言葉です。接続詞です。先に述べたことが原因若しくは理由となって以下の事が起こるといふこと。それが“だから”という言葉の意味です。『**主の祈り**』の背景を意識しながら、文脈に沿って理解する必要があります。**5 節**以降の祈りに関する教え、警告。そこをしっかりと押さえた上で、この『**主の祈り**』を私たちは祈らなければなりません。偽善的な祈りは禁止されています。公の場で、特に教会の中で、人に見せる、聞かせるような祈りが禁止されているといふことです。ですから、礼拝プログラム中で『**主の祈り**』が祈られることには細心の注意が必要だといふことです。そして同時に密室で祈ることの勧めがなされています。祈りの密室が天の開かれた所となります。祈りの対象は、人ではなくて神であります。自分に栄光を帰するのではなくて、神に栄光を帰す祈り。それが求められているといふことです。『**あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。**』だから次のように祈りなさい。**25 節**のところを見ていただくと、『**25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食うか、何を飲むかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。**』**33 節**にも『**33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。**』で、**34 節**にも『**34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。**』その“だから”が、重要語であって、その“だから”の中に、『**主の祈り**』が入っているといふこと。全部つながりがありますので、しっかり意識していただきたいと思います。『**主の祈り**』は、祈りの手本、モデル、型、模範となっていますから、つつい文脈から外されて、この『**主の祈り**』の文言だけが光を当てられて、スポットライトを当てられて、一人歩きしてしまうかもしれません。でも、むしろこれは、『**主の祈り**』というよりも、**私たちの祈り、弟子たちの祈り、家族の祈り。**『**だから、あなた方はこのように祈りなさいと**』、イエスが教えられているわけです。祈り方を学ぶために、教えられた祈り。その意味を知るためには文脈をしっかりと押さえて、文脈を押さなければ正しく理解することができません。で、ついでながら『**主の祈り**』と呼ばれるにふさわしい祈りが、ここではなくて別のところにあるといふことも心の片隅に置いておいて下さい。それは『**大祭司の祈り**』とも呼ばれている**ヨハネの福音書の 17 章**に記録されている祈りです。ゲッセマネの園でイエス・キリストが実際に祈られた祈りですから、それはまさに『**主の祈り**』、『**大祭司の祈り**』と呼ばれるものです。それはまた**ヨハネの 17 章**を開いて頂いて、

皆さんがその内容も見て頂くと、それこそが主の個人的な祈りだと気付くかと思います。これはむしろ今私たちが見ているいわゆる『主の祈り』と言うのは、主の個人的な祈りというよりも、私のための公の祈りとなっています。

で、『**天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。**』一つ一つ言葉を取り上げながら、簡単に説明を加えていきたいと思えます。まず祈りの呼びかけ、それは『**天にいます私たちの父よ。**』となっています。言うまでもないですが、祈りの対象は、父なる神であります。人に見せるために人前で、じゃないです。人に対して、人に褒められたくて、人に報われたくて、じゃなくて。私たちはこの目に見えない父なる神に対して、人はうわべを見るが、心を見られるその主に対して、私たちは祈るわけであります。祈りにおいて最も大切な事は、この祈りの対象を正しく知ることです。父なる神を知れば知るほど、私たちとしては祈りたくなります。祈らざるを得なくなります。なかなか祈れないのは、あなたが父なる神を知らないからです。神がどんなに力のある方か知らないで、私たちは祈ることをせず、自分の力でなんとか事をなそうとします。状況をなんとか自力で打開しようとして。祈ることをせずに。それは偏^{ひとえ}にああなたが父なる神を知らないからです。で、勿論自分の力も全然分かっていないと思えます。祈らない人は、神を知らないだけじゃなくて、実に高慢な人です。なぜ祈るか。自分をわきまえていれば、あなたは祈り無しでは何もできない、ということを知っているとしますから、必然的に祈ると思えます。祈らない人に限って、自分をわきまえていない、自分の立場も、自分の力も全く分かっていないので、祈りよりも先に行動した方が早いとか、祈ってるような暇なんかない、どんどんやっちゃえ、ということですね。それは父なる神を知らないばかりか、自分のことも分かっていない人たち。実に不遜で高慢な人たちということです。まず私たちは祈りの対象である父なる神を知る必要があります。ですからここで自問して頂きたいのは、この天地万物を造られた全知全能の神があなのお父さんなのかどうか。あなたはこの方の子供であるのかどうか。これは父と子の対話です。祈りは、父と子のコミュニケーションです。父なる神との関係をあなたがまだ持っていないならば、祈ることすらできないわけです。父なる神と関係を持つためには、あなたはまずイエス・キリストを個人的な救い主として信じ受け入れなければなりません。そうして初めて私たちは祈ることができる、若しくは許されるわけです。あなたがこの神と、父と子の関係を持つようになると、その祈りというものはまさに本能的に、自然に行われるものとなります。赤ん坊が親を呼び求めるような、そういう感覚です。親が誰か分れば、あなたは親に向かって声をかけられます。赤ちゃんであれば泣き叫ぶようにして祈るわけです。そして、この天の父はただお一人だということを私たちは『**十戒**』から教えられています。第一戒、『**あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。**』と。冒頭でこの『**主の祈り**』は『**モーセの十戒**』と重なるということを行いました。モーセの第一戒と『**主の祈り**』の第一声。それは重なるわけです。『**あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。**』この最初の言葉、最初の戒めをあなたが守るならば、あなたは必然的に祈ることになります。でも、この第一戒を破るならば、天の父に祈る事はしません。むしろほかの神々に頼ろうとします。祈るよりもまずは金とか、祈るよりもまずは仕事、祈るよりもまずは私のアクティビティー。それがあなたの神です。ですから、『**十戒**』の第一戒を破っている者は、天の父に祈ることもしませんし、天の父に祈らない人たちは『**十戒**』の第一戒を既に破っているという事でもあります。ただ、このお父さんは憐れみ深いお方です。私たちのような者を見捨てない、見放さない。そして忍耐をもって待ち続けて下さるお方です。祈れば必ず応えて下さいます。無視する方じゃありません。「今忙しいからお前のような者の祈りには応える暇もない、義務もないのだ。」と、そんなことは言わないお方です。祈りは必ず聞かれますし、必ず応えられます。この父なる神と私たちは、人格的な交わりを持った上で祈る必要があります。この神と人格的な交わりも持たずに、ただ『**主の祈り**』を、祈祷文を読み上げるように唱える。それはまるで自分のお父さんに対して、普通に会話せずに、原稿用紙に書いた、人の書いた文章を自分が読み上げるようなもので

す。そこは違和感があります。本当に父と子の関係があるのかどうか疑わしいものです。『主の祈り』をそのように祈祷文の如く、機械的に読み上げるのはまさにそういうことなんです。他人の書いた原稿を自分の父親の前で読み上げるようなものです。そんな読み上げられた文章を聞いて、あなたのお父さんは喜んでくれるでしょうか。「私はお前と話をしたいんだ。」と。「お前の言葉を聞きたい。人の言葉じゃなくて。」それが父の願いです。『天にいます』と言う事は、この父は天におられると、ありますけれども、私たちの父が天におられるという事は、私たちの家は天にあるということでもあります。ピリピには『私たちの国籍は、天にある』と言われています。ですから、常に祈るときには、天のことを思う必要があります。マイホーム、それは地上にはなく、天にあるということです。地上のことばかり思って祈ってはならないということです。天のことを思って、天に思いを馳せて、永遠なるものに夢を見るようにして祈るわけです。わくわくしてきます。地上のことばかり思って、ないものねだりすると、私たちの祈りはとてもつまらないもの、会話というよりも、無い物ねだりをする未熟な子供が泣き叫ぶような祈りになってしまいます。

で、次に“天にいます私たちの父よ”の後に、『御名があがめられますように』と続きます。この『あがめられる』という言葉は、直訳すると“きよくする”という言葉です。または“聖別する”というふうに訳されます。聖書で“聖い”この“聖なる”というのは、分けるというがその原意であります。ですから“神の御名があがめられる”というのは、『この世のものとは区別される』、分けられるということです。名前、人格、性質、性格、属性、権威、力を表すものであります。神様とこの世の神々と同じに考えてはいけません。神様と人間を同じに考えてはいけません。神様とサンタクロースを同じに考えてはいけません。神様とアラジンのランプを同じ考えといけません。この神は人格のあるお方です。聖書において、神の御名を聖とするという事は、何度も語られております。イザヤの 29 章 23 節に『彼が自分の子らを見、自分たちの中で、わたしの手のわざを見るとき、彼らはわたしの名を聖とし、ヤコブの聖なる方を聖とし、イスラエルの神を恐れるからだ。』同じくイザヤの 48 章 11 節『わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行う。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。』神様の名前、それは他とは区別されるべきものだということです。イザヤの 52 章の 5 節、6 節もお読みします。『⁵ さあ、今、ここでわたしは何をしよう。—主の御告げ—わたしの民はただで奪い取られ、彼らを支配する者たちはわめいている。—主の御告げ—また、わたしの名は一日中絶えず侮られている。⁶ それゆえ、わたしの民はわたしの名を知るようになる。その日、『ここにわたしがいる』と告げる者がわたしであることを知るようになる。』十戒の第二戒に『あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。』そして十戒の第三戒には『あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。』とあります。神をほかの神々、偶像と同等に考えてはいけません、同じレベルに、同じ程度に考えてはならない。そしてこの神の御名をみだりに唱えてはいけません。“みだり”には『虚しく唱えてはいけません』と。先ほど読んだイザヤの中にも『わたしの名は一日中絶えず侮られている。』とありました。私たちはこの神の御名をあがめる必要があります。神の人格、性格、性質、属性、権威、力、それが如何なるものか。私たちの性格とは全然違います。私たちの肉の父親とも全然性格が違います。他の宗教の神々とも全然違います。力においても、また権威においてもです。ですから、この『御名があがめられますように』というのは、私がこの神を人格的に深く知ることによって、応えられるわけです。

そして、さらに『主の祈り』の 9 節のところ目目を留めて下さい。『御名があがめられますように』その後 10 節『御国が来ますように』と。イエスが山上の説教を語る前に、公宣教の第一声において「時が満ち、神の国（天の御国）は近くなった。悔い改めなさい。」ということを行っています。ですから、まずはここでイエス・キリストは、悔い改めるためにこの『山上の説教』をし、そして「天の御国が近づいたから。」と、そのことを意識するように。天の御国、私たちの故郷であり、そこに引越す日が近づいてきたと。そのことを意識しながら、その日が一日も早く来るように願い求めながら生活すべきだということがこの

祈りの中で教えられています。文字通りの神の御国、天国というのは、黙示録 22 : 20 において、いわば御国が完成するという状態を見るわけです。そこは聖書の最後の言葉、その最後の言葉は、最後の祈りと言って良いと思います。『これらのことをあかしする方がこう言われる。(イエス・キリストがこう言われる。)'「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。』この主イエスが来ることによって、神の御国が完成するわけです。ですから、これは聖書の最後の祈りであります。最後の言葉にして、最後の祈りであるならば、この祈りこそ最も重要だということが分かると思います。何を一番祈り求めるべきか。それはまさにこれだと。だから私たちはこの言葉を教会の名前にも使っています。“マラナサ”それは「私たちの主よ、来て下さい。」という意味です。それは祈りであります。最も重要なことを祈る祈りが教会の名前であるわけです。で、言うまでもないことですが、このイエス・キリストが来ることによって、イエスの支配が始まるわけです。完成するわけですが、その支配こそ神の御国です。“basileia” (バシレイア) というのがギリシャ語ですが、それは『神の支配』と訳される言葉です。『神の国』とは“神の支配”。イエス・キリストを信じた時から、私たちの心の内に神の支配が始まるわけです。私たちは皆霊的イスラエルとなって、イスラエルは『神に支配される者』という意味ですが、私たちはもう既にイエスを信じた瞬間に、神に支配される天の御国の住民、天に国籍をもつ者とされたわけです。そして、私たちは物理的にもその神の支配である天国に入れて頂けるわけです。で、その日というのは、イエス・キリストが戻って来られる日です。だから、その日を私たちは心待ちにしながら、『御国が来ますように。』と祈るわけです。言い換えれば「主よ、来て下さい。」と祈るわけです。“マラナサ”という祈りと全く同じです。で、アランデット・パスという有名なアメリカのバイブル・ティーチャーが『御国が来ますように。』と私たちが祈る前に、「私の王国が消え去るように。」と祈らなければなりません。』と言っています。「天の御国が来ますように。」と私たちは『主の祈り』の中でも当然祈るんですが、でも、その前にまずは「私の王国が消え去るように。」と。口では、口先では「御国が来ますように。主よ、来て下さい。マラナサ。」と言いながら、私たちはいつまでも自分が心の王座に着いて、自分の王国を失いたくないと思っています。でも、自分の王国が消え去るように祈らなければ、それは偽善的な祈りになってしまいます。「天の御国が来ますように。」と祈る前に、「私の王国は消え去りますように。」と意識的に祈らなければなりません。

で、その続きとして『みこころが天で行われるように地でも行われますように。』“みこころ”という言葉は、祈りにおいては最も重要な言葉となります。ゲッセマネの祈りは、イエス・キリストの祈りで、その祈りこそ、祈りの真髄とよく呼ばれます。マタイ 26 : 39 にあります。『わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。』“わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。”これが祈りの真髄です。みこころと祈りの関係、それをしっかりと押さえて頂きたいと思います。祈りとは父のみこころを祈ることです。私たちの心、私たちの意志を押し付けることではありません。イエス・キリストは父なる神のみこころを行うためにこの地上に遣わされたお方だと、ヨハネ 6 : 38 に書いてあります。(『わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。』) そして、イエスがそうであったならば、イエスの弟子である私たちも当然のことながら父のみこころを行うためにこの世に存在しているわけです。私のこころを行うため、私の意志を行うため、私の願望を実現するために、自己実現のために私はこの世に生かされているのではないということです。マタイ 12 : 50 にこう書いてあります。『天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。』と。イエスの兄弟ならば、イエスの家族ならば、イエスと同じように、イエスの父、父なる神のみこころを行なう者でなければならぬということです。神のみこころを行なわない者は、当然イエスとは何の繋がりもない者です。関係もない者ということです。マタイ 7 :

21 のところには、『わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。』祈る時に「主よ、主よ。」といくら熱心に祈ったところで、あなたが天におられる父のみこころを行なわなければ、あなたは天国には入れないということです。で、これは偽預言者のことを言っているんですけども、偽預言者は勿論天国には行けない者であります。悔い改めれば別ですけども。また、ヨハネ 4 : 34 にイエス・キリストは、父のみこころを行なうことはわたしの食物であると。(『イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。』) 食べること。それは霊的食物のことを指しているわけです。みこころを行なうことがイエスにとっての霊的な食物、原動力となる、力となるということです。ですから、神のみこころを行っている者は常に霊的食物に満たされています。そして、このマタイ 6 章、いわゆる『主の祈り』というのは、イエス・キリストが弟子たちに教えられた祈りで、「だから、あなたがたはこのように祈りなさい。」と教えられた祈りですから、この『主の祈り』こそ、みこころにかなった祈りであるということです。イエスが弟子たちに教えられた祈りですから、この祈りこそ、みこころにかなった祈り。私たちはいろんな祈りをささげますが、すべてがみこころにかなっているわけではありません。みこころにかなっていない祈りは、当然回答されないということです。どんな祈りでも、神様は耳を傾けて無視はされませんが、祈ったら確実に祈った通りに応えられるかと言ったら、そうじゃないです。祈った通りに応えられるのは、神のみこころにかなった祈りである場合のみということです。で、その中で『主の祈り』と呼ばれるこの祈りは神のみこころにかなっていますから、この祈りを祈ることは神のみこころということです。神のみこころならば、大いに祈るべきであります。但し、そのみこころを阻もうとする存在があるということ覚えなくてははいけません。みこころがならないように妨害する者たちがいます。それは私たちの敵でもある悪魔、サタン、その手下である悪霊たちのことです。そして、私たちの肉の内にも、「父のみこころよりも、自分の心を行ないたい。父の意志よりも、自分の意思を貫きたい。神の願いよりも、私の願い。神の志よりも、私の志。私の夢。私のやりたいこと。」それをもって神のみこころを阻もうとするわけです。ですから、神のみこころを阻むのは、敵であるサタンをはじめとした悪霊の勢力、そしてもうひとつは私たち人間であります。神によって造られた被造物の中で、神のみこころに逆らうのは唯一人間だけです。人間の中には、神を拒む心があります。私たちは罪人であります。ですから祈る際には、常に自分との葛藤があります。肉との戦いと言って良いと思います。そして、霊の戦いもあるわけです。祈る際には必ずこの戦いがあります。みこころを阻もうとするものがあるので、『みこころが行なわれるように。』ということ祈るわけです。これを祈らなければ、私たちはすぐに敵の思う壺、敵の誘惑やプレッシャーに負けてしまったり、若しくは自分の肉の思いで祈ることをしなかったり、又は口先だけの祈りとなって神のみこころを全く外したような、独り言のような祈りをしてしまうこととなります。ですから、みこころを祈り求めることは大事であります。みこころを祈る。それは神の目的を満たすということを求めることです。祈りは神の目的を満たすためにあるということです。あなたの目的を満たすためにあるんじゃないんです。「祈りというのは、神のみこころを変えて、ご計画を改めさせて、私の願いの成ること。」そのように思い違いをしている人が大勢います。その上で「天の父」と祈って、最後には「イエス・キリストの名によって祈ります。」なんてことをいけしゃあしゃあ言うんですけども、そうではないということを知って下さい。呼びかけが正しくても、使っているボキャブラリーが正しくても、それではパリサイ人と同じ偽善的な祈りということです。祈りは神の目的を満たすためのものです。神のみこころを変えるんじゃないんです。むしろ、私の思いを変えるためにあるんです。私の計画じゃなくて、神の計画が成るように。ですから、私の計画を変える。私の願いを変えて、神の願いに沿うようにする。それが祈りの目的です。リチャード・ベネッドはこう言っています。「真の祈りとは、私の意思に合わせて神のみこころをねじ曲げるのではなく、神のみこころに合わせて自分の意思を曲げることです。」だから

祈るということは私たちに必要なことなんです。これが真の祈りだと。私の意思に合わせてみこころをねじ曲げるのではなくて、神のみこころに合わせて自分の意思をねじ曲げること。だから祈りは決して楽なものではないです。自分の意思をねじ曲げるという、つらい作業が伴うからであります。私の願うようにではなく、あなたのみこころのようになさって下さい。時には血の汗を流さなければならないようなこともあるかもしれません。「祈りは労苦するものだ。」と、パウロはよくその手紙の中で語っています。祈りは重労働です。

そして、今見た通り **9 節、10 節**では、まずは祈る対象、そのお方はどのような方なのか。そして、そこで祈り始める内容というのは、私のことじゃなくて、この天の父のことです。神のことを祈るわけですから。祈りは所謂祈願ではない。単に必要な願いをまくし立てることじゃない。それを神に請求する、要求する、押し付ける、所謂願掛けとは全く異なるということが分かります。まずは神のことから祈るんです。

で、**11 節**。主の祈りの後半部分になります。『¹¹私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』“糧”という言葉は、原語では“パン”となっています。で、当然この時代パンが主食でした。毎日食べる物です。日本人の主食が御飯ならば、“御飯”と訳しても勿論差し支えないわけですが。日毎の糧、主食も、神様が与えて下さる。へりくだっていないければ、このように祈ることは出来ません。マタイ 6 : 31 から『³¹ そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。³² こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。』神は日毎の糧が私たちに必要だということをよく知っています。その上で『³³ だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。(主の祈りのまずは **9 節・10 節**を祈りなさい。) そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。³⁴ だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。』あすのことを心配せずに、今日の日毎の、毎日の糧を与えて下さい。「老後の分まで与えて下さい。一生涯保証して下さい。」ではないんです。日毎です。毎日。一生ではないんです。日々この神にすがっていく。日々この神に信頼していく。日々この神にお願いしていく。私たちはそのようにへりくだって、毎日この神の前にへりくだって、「生かして欲しい。必要を満たして頂きたい。」そのように神に求める必要があるということです。「今日一日、十分な日毎の糧を与えて下さい。」と、毎日毎日私たちが祈る言葉を父なる神は、微笑ましく、喜ばしく受け止めて下さいます。でも私たちは本当は面倒なので、一生分備えてもらったそれでよし、と思ってしまう。でも神様は私たちと毎日コミュニケーションを取りたいんです。もし、一生分神が備えて下さるということならば、私たちは毎日「日毎の糧を今日も与えて下さい。」とは祈らないと思います。毎日神様のところをお願いしには行かないと思います。薄情なものです。でも同時に私たちは愚か者ですから、いっぺんに一生分の物を与えられたら、私たちはそれを賢く使うことは出来ません。一年分まとめてもらったとしても、それを賢く一年間を通じて活用することは出来ません。神の計画通りに用いることすら出来ないんです。一日一日備えて頂く。それが私たちのペースに合っています。あまりまとまってももらったら、私たちはそれを浪費してしまったり、無駄にしてしまったり、神のご計画通りに使わずに、無駄にしてしまうことがあるわけです。旧約聖書の時代、丁度荒野と民の姿を思い出して下さい。毎日彼らは食料を神様から頂いていました。必ず毎朝になると天からのパンが降ってきたんです。それは何だろうと思って、それが『マナ』という呼び名です。『マナ』とは、「これは何だろう。」という意味です。で、その不思議な食べ物、天使のパンとも言われています。それを神は毎日与えたわけです。荒野の旅をする間の一生分を、旅路のすべての必要を満たすための分をいっぺんに一回に与えたんじゃないで、毎日毎日小分けにして与えられたわけです。それは毎日毎日イスラエルの民がすべて神様から頂くものによって、感謝をもってその日を過ごすためであります。箴言 30 : 8 に『貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。』という言葉がありますけれども、これ

が実際のところ『主の祈り』の丁度『¹¹私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』と内容が重なっています。箴言 30 : 8 の言葉を祈ったような祈りの内容となっています。参考までに人間は一生のうちに平均約八万回食事をするとされています。毎回毎回食前の祈りをささげるならば、私たちは八万回平均して祈ることが出来ます。有り難いですね。食べなければ生きていけません。でも、祈らなければ生きていけないんです。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの**ことば**による』のですともあります。神の言葉無しでは、神に祈ること無しには生きていけない。それをすぐ忘れる私たちですから、食前の祈りというのは、有り難い習慣です。食べる前に祈らなければならない。『日毎のかてをきょうもお与えてください。』と言っているわけですから、その祈りに応えて下さった神に感謝をささげることが出来るわけです。それがあって初めて私たちは何度も何度も神の前に否応無しに出るといえるのか、否応無しに神に語りかける。祈りがそこで成立するというのを見るわけです。これは神の憐れみであります。

で、『お与え下さい。』と、これはへりくだった者しか言えない言葉です。食前の祈りの話をしましたけれども、私たちは既に調理された食事に対して、食前に感謝の祈りを習慣的にささげる者でありますけれども、『主の祈り』は、その前に「与えて下さい。」と言っています。求めてもいないのに、目の前に用意された食事に感謝をする。そういう習慣になってしまっていたならば、改めて頂きたいと思います。当たり前じゃないです。食前の祈りをささげる前に、「この食事を感謝します。」と祈る前に、『主の祈り』では、『日ごとの糧をきょうもお与えください。』と祈るべきだと言われてますので、まずは私たちは求める必要があります。謙遜さが常に必要だということです。必要のみを求めて、必要を備えて下さる方を認めなかったり、忘れたりする私たちであります。でも、私たちの天の父は、世界一、否、宇宙一大金持ちだ、大富豪だということを覚えて、まずはこの父に求めるということをして頂きたいと思います。あなたの必要を全部ご存知です。そして、あなたの必要を満たしたいと願っておられる方です。あなたが毎日この父のもとに来ることを楽しみに待っているお方あります。

そして、これは自己中心では祈れない祈りです。と言うのはこの『主の祈り』というのは、すべて代名詞は“私たちの”です。「私の”日ごとの糧をきょうもお与えください。」じゃなくて、『¹¹私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』ということですから、自分の必要ばかりを願い求めている自己中心な人には祈れない祈りです。自分の必要だけでなく、他の人々の必要も同時にとりなすようにして祈っているわけです。私だけじゃなくて、私の兄弟姉妹も、この MGF に集っているすべての人たちの食が、今日一日の糧が満たされますように。他の教会の、他の世界の、他の国々の人たちの、貧しい子供たちの、飢え渴いている人たちの必要が満たされるように。そういうことも含めてとりなしの祈りとなっています。世界の人たちは十分な食事を毎日食べていないことを私たちは知っているわけです。毎日 15,000 人もの人たち、一分間に 28 人が世界では餓死していると言われています。飽食の時代と言われてますけれども、日本では食べ物がどんどん捨てられております。でも、日本でも餓死する人たちも出ているということを私たちは時折ニュースで聞きます。日本のホームレスでも、行き倒れになって死ぬ人たちが年間 500 人もいます。ホームレスと言ってもいろんな人たちがおりますけれども、でも実際に食べ物なくて、飢えて餓死する。自分の必要さえ満たされれば、自分のお腹さえ満たされればそれでよい。そういう自己中心の人には祈れない祈りであります。そういう自己中心の人はこの祈りを祈ってはいけません。他者のことを気にも掛けない人は、『主の祈り』を祈る資格はありませんし、その人が祈れば偽善の祈りになります。私たちの祈りも正されます。自己中心な祈りでは駄目だと。私たちの祈りは常に自己中心になりがちです。自分の問題やニーズにばかりフォーカスが置かれすぎていて、他の人のニーズや他の人の悩みや問題に対しては目が留まりません。でも、この『主の祈り』は、あなた以外の誰かが祈ってくれています。誰かが自分のためにも祈っている。『主の祈り』を学べば、それを知ることが出来ます。『主の祈り』はとりなしの祈りであります。

で、12 節。『¹² 私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』“負い目”というのは負債のことです。ここでは勿論罪のことを負債というふうに表示しております。*印が“負い目”のところについていて、欄外には“あるいは「罪」とあります。文語訳聖書では『我らの罪を赦し給え。』と。でも、原文は“負債”であります。罪を、支払っていない負債のことを、『負いめ』と言っているわけです。で、この言葉はマタイ 18 : 23 以下にも使われています。マタイの 18 章のイエスのたとえ話。ペテロがイエス・キリストに「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」当時のユダヤ教のラビは三度まで赦せば十分だと教えていたわけです。ですからペテロは、それを更に倍にして一を加えて、“七度まで” 7 は完全数ですから、「七度まで赦す。」ということ言えばイエスにきっと褒めてもらえるに違いないと、そうきたいしたわけですが、イエスは 22 節で『七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。』490 回赦せばいい。もうそれ以上は赦さなくいいという意味ではありません。もう数えるのを忘れてしまうくらい、とにかく赦し続けなさいと。赦すことをやめてはいけないということです。

で、その流れの中でイエスはたとえ話をされたわけです。『²³ このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたと思った。²⁴ 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、(1 デナリが当時の一日の平均賃金でありました。1 タラントは 6000 デナリに相当します。ですから、6000 日分の給金の、その一万倍ということです。一万タラントという膨大な借金のあるしもべが) 王のところに連れて来られた。²⁵ しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。²⁶ それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。²⁷ しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。²⁸ ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間、彼から百デナリ (百日分の給金です。) の借りのある者に出会った。(一万タラントよ比べたら取るに足りない額です。) 彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。²⁹ 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。³⁰ しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。³¹ 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。³² そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。(負債全部を、負いめ全部を赦してやったのだと。)³³ 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』³⁴ こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。³⁵ あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。』ここで言われている“借金・負いめ”同じことでもあります。『¹² 私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』

英国国教会の、聖公会の祈祷書の中に、この『主の祈り』の解説も加えられているものがあります。ここでは、『私たちは成すべきであったことをしないままで済ませていました。そのことをお赦してください。』という文言があります。「私たちは成すべきであったことをしないままで済ませていました。どうか、お赦してください。」ということです。犯した罪よりも前に、成すべきことをしなかった罪を正しく告白しているわけです。

マーティン・ロイドジョーンズという人は、『罪とは人間がひたすら神の栄光を目指して生きていない状態のことである。』と言いました。私たちは罪と聞くと、違反行為・犯罪行為、実害を与えたような行為、損害を与えたような行為、実際に傷を付けたとか、そういった具体的な罪をイメージするかもしれませんが。でも、私たちは成すべきであったことをしないで済ませていた。ヤコブの手紙にも「成すべき正しいことをしないのは罪である。」と言われています。で、その罪というのは特定の行為というよりも、もっと大き

いものです。もっと深いものです。ロイド・ジョーンズが言う通り、「罪とは人間がひたすら神の栄光を目指して生きていない状態のこと。」それが罪であると言われてしまったら、私たちは誰もが皆、神の前には堂々と出れない者だと。神の栄光を目指していなかった。むしろ、自分の栄光を目指していた。神のことなんかそっちのけで、自分が喜ぶこと・自分が楽しむこと・自分にとってメリットがあること・自分が目立つこと・自分が褒められること・自分が感謝されること・自分が気持の良いこと・自分が優先なこと。そういうことをすべて聖書では、罪と呼んでいるわけです。

アンドリュー・マーレーという人は、『**祈らない罪は、すべての悪の最も深い根である。**』と言いました。祈らないことも罪です。サムエルがそう言っています。祈らないことは罪であると。天路歷程を書いたジョン・バニヤンはこう言っています。『**祈りは罪をやめさせます。罪は祈りをやめさせるために誘惑します。**』と。ですから、罪とか負いめを考える時、私たちは特定のものをイメージするかもしれませんが、勿論それも含めて頂きたいですが、でも、それ以上のものだということを知って頂きたいと思います。広範囲に及ぶということです。もっと根が深いということです。成すべき正しいことをしていない。それも全部罪です。人間がひたすら神の栄光を目指して生きていない状態、それが全部罪です。祈らない罪こそ、すべての悪の根である。で、罪は祈りをやめさせる誘惑を私たちにしてくるわけです。それらのことも私たちは神の前に認めて、告白しなければいけません。そして、他にも一つ一つ覚えているものもあれば、覚えていないものもあるわけですが、それらに対して私たちはすべて赦しを必要とする者であります。赦されていないと、私たちの心は不安でいっぱいです。「裁かれるんじゃないか。罰せられるんじゃないか。祟りがあるんじゃないか。呪いがあるんじゃないか。」赦しというのは、肉体に食べ物が必要であるのと同じように、私たちの霊において又は心において、赦しというのは絶対不可欠なものです。赦しがなくては、与えられなくては、私たちの心は病んでしまいます。衰えて死に絶えてしまいます。肉体に日々の糧が必要であるのと全く同じです。赦されなくては私たちは生きていけないわけです。人を赦さないということは、人を殺すことを意味します。でも、イエスはこの罪の赦しのために自らがいのちのパンとなって、私たちに体を裂いて、血を流して、ご自身を与えて下さったわけです。そのことを私たちは毎回聖餐式に覚えているわけです。罪が赦されたことを私たちは確認し、感謝し、そのことを喜んで記念して聖餐式をもつわけです。イエスを覚えてこれを行なうわけです。日ごとの糧だけではなくて、罪の赦しなくしては、人は生きていくことが出来ません。罪が赦されていない、罪悪感が常に募っています。^{さいな}苛まれていきます。罪が赦されていないければ、救われている実感もないわけですから、天国に行けるかどうか分からない。死んだらどうなるのかも分からない。でも、罪が赦されていれば、私たちは死んでも行き先が分かっていますから、死そのものは決して怖いことじゃない。悪いことじゃない。むしろ、死ぬということは、単純に天国に引っ越すことでありますから、プレッシャーもないわけです。恐れもないわけです。もっと良いところに引っ越すという意味では、ワクワクするような体験です。ですから、クリスチャンは死ぬことが楽しいんです。びっくりするかもしれませんが。実際に罪の赦しを得ている者は、そのような感覚を得るんです。でも、この罪の赦しがない者にとって、死というのはすべての最後の、最も忌まわしいこと、最悪の事態です。クリスチャンにとって、死は最悪の事態ではありません。天国に引っ越す、永遠が始まる最高の瞬間であります。

で、この神による罪の赦しと他の人たちを赦すということがここでは結び付けられております。クリスチャンはすべて罪赦された者であります。罪赦され者であるならば、他者の罪も赦すべきだと、先程の**マタイの18章**のたとえ話にもありました。一万タラントの膨大な借金を赦してもらったのであれば、あなたに対して**100**デナリというあまりの少額の取るに足りない借金をしている人たちのその負いめをあなたは赦すべきだと。これは当然のことだということです。神に赦された者は必然的に人を赦すようになります。赦された者として、他の人を赦す恵みがそこから広がっていくわけです。私たちはそのようにして人を赦

すことが出来ます。今までは人を赦せなかったかもしれません。なぜならば、あなた自身が赦されてなかったからです。でも、赦されたという体験をすれば、あなたは人を赦すことが出来るようになります。人を赦せないということは、先程のたとえと同じように、獄吏に引き渡されて一生が人を恨み続け、憎み続け、ずっと閉じ込められているような、暗やみの中に置かれているような状態です。でも、一度人を赦すならば、あなたは解放されます。互いに罪を赦し合うということ。負いめを、負債を棒引きにすること。これは『主の祈り』の強調点であります。というのは、続く **14 節**と **15 節**。そこに『¹⁴もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦して下さいます。¹⁵しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。』で、さらには先ほど読んだ**マタイ 18 章**のところにも全く同じ言葉が繰り返されてました。『主の祈り』においても罪の赦しが語られ、そしてその『主の祈り』が教えられた後に、もう一度イエスがこの罪の赦しの点だけをさらに強調して語られているわけです。人を赦していない者は、この『主の祈り』を祈る資格はありません。神の赦しの恵みに与る者、神の家族の間の交わりにおいても互いに赦し合うことを実践すべきであります。勿論誤解のないようにして頂きたいのですが、あなたが人を赦せば神からも赦されるという話ではありません。罪の赦しは十字架によってイエス・キリストが体を裂いて、血を流したことで与えられたものです。あなたがいくら寛大になって、「このことには目をつぶろう。このことは水に流そう。人を赦せば自分の罪が赦される。」という話ではないということです。そうではなくて、あなたは一万タラントという膨大な罪の借金をイエス・キリストが全部肩代わりして、代わりに弁済して下さったわけですから、その事実をもってあなたは 100 デナリの貸しのある人たちを赦しなさいと言っているわけです。絶対にこの点を誤解してはいけません。『人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。』と言うのは、赦さない霊が、スピリットが、心があると、あなたの祈りも聞かれないと言っているわけです。人を赦しないと、神に対するあなたの祈りが妨げられますよと言われているわけです。この天については、もう**マタイの 5 章**でも見た通り、兄弟に対して恨みを抱いたままでは、神の前に出ることは出来ないと、もう既に文脈で分かっているわけです。人を赦せない苦々しいスピリットがあれば、『主の祈り』は勿論のことですけれども、祈りそのものがまともに出来ないということです。人を赦せない人は祈ることすらはばかれる。祈ることが出来ません。出来たとしても、聞かれないということですから、虚しい限りです。馬鹿らしい話です。愚かしい話です。人を赦せない。それはあなたが赦しないと決め込んでいるからです。赦さないことを選んでいる、選択しているからです。でも、それが如何に愚かしいことか。祈ることが出来なくなってしまふんです。それと引き換えに、人を赦さない。それほど愚かなことはないと思います。「でも、そんな人を赦したら、あの人はいい気になるだけだ。私ばかりが損したように感じる。私ばかりが悲しい思いをして、傷付けられて、何故あの人だけがただで赦されて。ムカつく。フェアじゃない。不公平だ。」と私たちはそんなふうを考えて、赦すことをしません。でも、赦すことをしなければ、あなたと父なる神様との関係は、正常でなくなるわけです。祈りというコミュニケーションがとれなくなるわけです。私はその損失の方が、遥かに大きいと思いますから、人がどう思おうと関係ないわけです。人を赦したことで、その人がどう感じようと、全然悪びれていなくても、反省していなくても、悔い改めていなくても、そんなことはハッキリ言ってどうでもいいんです。そうでなくて、私が神と正しい関係を持ちたい。神の国とその義をまず第一に求めたいんです。だから、相手なんかどうだっていいわけです。神様がどう思うか。私は単にこの神に一万タラントという膨大な借金を棒引きして頂いたので、そのことが有難くて、嬉しくて、100 デナリ程度のことで一々私は獄中に入るつもりはありません。父なる神様とコミュニケーションがとれないなんて、絶対に嫌です。ですから、私はその神との関係を失いたくないので、私は人を赦します。人を赦さないということは、神との関係を失うことを意味します。救いを失うという意味ではありませんが、祈りはもう聞かれないということです。神と親しい健全な関係は、もう持てないということです。そして、あなたは

いつまでもその嫌な人と関係を持ち続けるということです。人を赦さないということは、その人のことを一日中考えるということです。時間の無駄としか言いようがありませんし、あなたがその人のことをそんなに思っていますけれども、その人はあなたのことなんか何にも思っていない。これ程馬鹿らしいことはないと思います。「あいつだけは赦せない。」と知っているその“あいつ”は、あなたのことなんかもう忘れてるんです。それなのに、あなたはその人のために、いつまでも考えて、いつまでも悩んで、いつまでも苦しんで、その人に縛られているわけです。で、それだけじゃなくて、神との関係すらあなたは失ってしまうわけです。もったいないどころか、もう害悪でしかありません。C・S・ルイスという人はこう言いました。『クリスチャンであるとは、赦し難い人々を赦すことである。神があなたの中にある赦し難いものを赦して下さったからである。』クリスチャンとは、赦し難い人々を赦すことだと。「私は人を赦していません。」その人はクリスチャンじゃないかもしれません。神があなたの中にある赦し難いものを赦された。一万タラントもの借金を赦して下さった。これが事実であるならば、人を赦すことはそんなに負担ではないはずであります。そんなに大変なことじゃないはずであります。自分の罪が全然分かってない人です。自分の罪の借金がどれだけ膨大なのか。罪の無いお方、イエス・キリストが、あんなおぞましい、恐ろしい、むごたらしい処刑を受けて下さった。それが全然分かってない人です。「イエスは勝手に死んだだけだ。」と。「私とは関係ない。」と言う人です。そういう人がクリスチャンとは言い難いわけです。また、マーティン・ロイドジョーンズはこう言いました。『キリスト者とは自分で自分を赦すことが出来ないにもかかわらず、神は自分を赦して下さったということを知っている人のことである。言い換えれば、自分が赦されている事実を驚いている人のことである。』また、マックス・ルケードという人は『クリスチャンをクリスチャンたらしめているのは、完全さではなく、赦しなのだ。』と。清く正しく生きている聖人君子が皆クリスチャンだと思うかもしれませんが、でも、クリスチャンをクリスチャンたらしめているのは、そのようなものではなくて、赦しです。私たちは単に罪赦された罪人です。その赦しがいかに素晴らしいので、あまりにも有り難いので、私たちはこのようにして喜んで、神をあがめるために、ほめたたえるために、教会に足を運び、聖書を毎日開き、そして祈ることをやめたりしない人たちです。

で、13節。『¹³ 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕カギ括弧があるのは、これは欄外にあるように、「最古の写本ではこの句は欠けている。」とありますけれども、この最古の写本というのが必ずしも原典に一番近いものとは言えないわけです。最も数の多い写本では、この〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕が含まれています。原文に私はこの言葉が記載されていたと考えております。まあ、有っても無くとも勿論『主の祈り』の価値は変わらないんですけれども、ただ重要な言葉でありますからしっかりとこれを含めて説明していきたいと思えます。まずはその『¹³ 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』簡単に説明しますが、イエス・キリストも私たちと同じ姿で、人間となってこの世にいられて、私たちが通るべきありとあらゆる試み・試練を受けられたわけです。ヘブル4:15に書いてあります。『私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。』ですから、誘惑を受けること自体は罪じゃないんです。これを誤解してはいけません。誘惑を受けること自体は罪じゃないです。イエス・キリストも誘惑を受けられたわけです。誘惑に会わないというのは、ここでは“試み”という言葉は“誘惑”と訳せる言葉なんですけれども、“試練”とも“誘惑”とも訳せますが、ここでは特に“誘惑”ということで理解して頂きたいと思えます。試みに会わないというのは、何の困難も経験しないという意味ではありません。すべての人は生きている限り困難に会います。イエス・キリストは世のあつては患難があると言っています。あなたがたの試練は人の知らないものではないと、パウロも言いました。でも、ここで言うのは“誘

惑”です。悪という言葉がありますから、そのように解することができます。『**試みに会わせないで、悪からお救いください。**』この“悪”というのは、悪しき者、悪魔、サタンを指す言葉でもあります。このように私たちは常にへりくだって、「自分ではすぐに誘惑に引っかかる。負けて、罪に陥る。自力で、自分の意志の力だけで罪から自分を守るなんてことは出来ないんだ。」と、それを認めた上で、こう祈るべきです。

『**試みに会わせないで、悪からお救いください。**』と。で、そのように祈る限りは、私たちは意識的に誘惑を避けなくてはなりません。祈っているながら、自ら誘惑に入っていくなんてことは、全く論外であります。マルティン・ルターは『**あなたは自分の頭上を鳥が飛び回るのを止めることは出来なくても、自分の頭に巣を作らせないようにすることはできるのです。**』と。名言だと思います。多くの人は、「私は弱いんです。すぐに誘惑に負けるんです。」でも、ルターが言う通り、確かに自分の頭上を鳥が飛び回るのを止めることは出来ないかもしれませんが、あなたの頭の上に鳥が巣を作ることは、あなたは作らせないようにすることは出来るということです。誘惑に会わないように私たちは努力することが出来るということです。祈るだけじゃなくて、自分の頭に巣を作らせないように誘惑を避けるということは出来るということです。

で、実のところ祈りというものは実に誘惑を避けるためには有効な手段であります。オズワルド・チェンバースという人がこう言っています。「**とりなしという奉仕に誘惑はありません。**(とりなしというのは、自分が人に代わって代禱するということです。) **自惚れたり、高慢になったりする危険もありません。これは実を結ぶ陰の奉仕です。これによって御父は栄光を受けます。**」と、オズワルド・チェンバースは言いました。とりなしという奉仕に誘惑はありません。自分のためじゃなくて、人のためです。自惚れたり、高慢になったりする危険もありません。で、サムエル・チャドウィックという、これも有名なクリスチャン指導者ですけれども、「**祈り以外にサタンの恐れるものはない。キリストを見失った教会は、善行は様々に行なう。(良い行いです。) 活動は盛んになるが、御言葉を黙想することがない。組織は充実してくるが、祈りが無い。魂は悪しき道にさまようのは勿論、善行の中でも失われていくであろう。サタンの関心事は、聖徒を祈りから遠ざけることである。祈りを欠いた研究も、祈りのない善行も、祈らない宗教も等しくサタンの恐れるところではない。サタンは我々の努力を笑い、知恵をあざける。しかし、我々が祈る時、サタンは震え上がる。**」と。ですから、祈ること自体、実は霊的武器ということです。誘惑に打ち勝つための武器でもあります。イエス・キリストは誘惑に陥らないように、目を覚まして祈りなさいと。誘惑に陥らないために祈りは有効です。ただ、自ら誘惑の真っ只中に入り込んでいきながら、「誘惑から守って下さい。」例えばすぐに酒に飲まれてしまう。そういう誘惑を受けている人が、わざわざ権堂に行って、「私を試みから守って下さい。」と。馬鹿らしい話です。そう祈るならば、もう権堂に近づかないとか、飲み屋に近づかないとか、アルコールを売っているところに近づかないとか、そういう知恵が与えられているわけですから、私たちはそのように祈った通りに行動すべきであります。

で、最後のところ。『**国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。**』というところは“**頌栄**”と呼ばれる部分です。この“**頌栄**”と呼ばれる部分は、**第一歴代誌 29 : 11~25**。丁度今週カバーしたところに実はダビデの祈りがありましたけれども、そのダビデの祈りの中にこの頌栄が含まれています。ですから、これはイエスのオリジナルというよりも、聖書に基づいたイエスの先祖であるダビデの祈りからとられたものです。ですから、このようにしてイエスはダビデの祈りを部分的に使いながらも、それを弟子たちに教えられたわけです。私たちも聖書の祈りを学んで、その聖書の祈りを自分の祈りとしていくことが出来るわけです。で、この“**頌栄**”はまた**黙示録 1 : 6**並びに**5 : 13**にも見られるものです。“**頌栄**”というのはそこを見れば分かると思います。こういった聖句を基に賛美歌も作られて、それが“**頌栄**”として歌われることもあります。神の国、それは神の支配と言いました。その神の国・支配と力と栄とは、とこしえに、永遠に、誰のものかと言うと、天の父・主のものだということです。

神の国。これは必ず完成するものです。イエス・キリストは「**悔い改めなさい。天の御国がちかづいた**

から。時が満ちて神の国が近づいた。」とイエスはメッセージされましたけれども、そのイエスの言われたことは必ず実現するわけです。イエスが戻って来られる再臨の時に、必ず神の国は物理的にも可視的にも実現するわけです。今は目に見えない神の支配が既にイエス・キリストを信じる者の中に始まっていますけれども、これが物理的にも神の国が到来する。それはイエスが来られるその日に実現する。ですから、この神の国は先程も紹介した通り、イエス・キリストが戻って来られることを祈る「主よ、来て下さい。マラナサ。」という祈りでもあると言いました。

そして、この神の力。これもとこしえまでもですから、変わらないわけです。イエス・キリストはきのうも、今日も、いつまでも同じ方として、変わらないお方であります。安定したお方です。私たちのように弱くなることはありません。変わってしまうこともないんです。神の国と神の力。それはとこしえまでも変わらない。

で、栄光もそうです。栄のことを“栄光”と言いますけれども。これは勿論神の栄光ですから、当然神は永遠な方ですから、その栄光も翳る^{かげ}ことがないわけです。ただ、その栄光を常に私たちは誰に帰するの^かということ覚えなくてははいけません。J・I・パッカーという人が『人間の罪の法則は、栄光は神にではなく、自分のものです。これは私たちの高慢の一面です。』と。それを私たちは“虚栄”と呼びます。虚栄心に満ちた人は自分の容姿、肉体美、衣服、技能、立場、影響を見せびらかし、拍手喝采を期待します。しかし、もし人々が自分に媚びへつらわず、行動に感銘を受けないと悔しがり、傷付くのです。円熟したクリスチャンは自分に栄光が帰せられることに満足するのではなく、人々が神に栄光を帰さないことに心を痛めます。円熟した、成熟した、熟練したクリスチャンは、神に栄光が帰せられないことに悲しみを覚えるわけです。ですから、例えば、あなたのやった奉仕に対して、人が「素晴らしいですね。凄いですね。あなたは素晴らしい人です。あなたの能力は素晴らしい。あなたの技術は素晴らしい。」なんてことを言っ^てあなたを持ち上げ、あなたをほめたたえたならば、あなたは心の中で悲しむわけです。勿論その人は、神以上にあなたを称えているとは意識していないかもしれませんが、でも中にはあなたに栄光を帰そうとする人たちがいるわけです。その時には褒められても、鼻にかけてはいけませんし、そんなことで喜んでいてはなりません。むしろ、成熟したクリスチャンは、自分ではなく神に栄光を帰してもらいたい。そのことを切に求めます。

で、もうこれで 13 節まで見ましたので、『主の祈り』の箇所は、ここまででありますけれども、最後にまとめをしたいと思えます。この、これは『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』で始まって、最後は『国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。』で閉じられています。これを端的に言い表すならば、この祈りは神礼拝に始まり、神礼拝に終わっています。それが祈りの型としてふさわしいということです。神礼拝・神賛美で始まり、最後も頌栄です。それで閉じられているわけです。そして、この『主の祈り』の一節の中に『私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』とありますから、“日ごと”ということは、毎日、つまりこれは毎日祈るべき祈りだということでもあります。『主の祈り』を教会に行つてその式次第には、皆で朗唱しましょうという項目があるので毎週日曜日には『主の祈り』を祈ります。でも、その日曜日の礼拝のプログラムの中だけで『主の祈り』を祈っているのであれば、それはみこころに反しています。なぜならば、『主の祈り』は“日ごと”祈るべき祈りだからです。でも、残念ながら多くのクリスチャンたちは、そのように『主の祈り』を日曜日のプログラムの中だけで、日曜日だけ祈る。それでは祈っている内には入らないということです。『主の祈り』を日曜日に祈るならば、月曜日も、火曜日も、水曜日も、木曜日も、金曜日も、土曜日も、毎日祈らなければならないということです。

で、この『山上の説教』若しくは『山上の垂訓』の結論部分、これはもう既に押えましたが、7 章 24 節のところには最後は岩の上に建てた頑丈な家か、若しくは砂の上に建てた砂上の楼閣か、それぞれに

同じ人生の嵐が襲います。でも、岩の上に建てた家は嵐が来ても、暴風雨が吹いても倒れません。でも、砂の上に建てた家は、嵐が来たら、人生の試練においてはすぐに倒れてしまう。砂上の楼閣であるというその有名な話がこの『山上の説教』の結論です。『**だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者は**』ただことばを聞いて済ませるだけじゃなくて、そのことばを聞いて行う者は、岩の上に家を建てた賢い人にたとえられる。その人の人生に嵐が吹こうと、どんな災難が襲おうと、どんな悲劇に見舞われようと、たとえ死が襲って来ても、その人は倒れないというのが『山上の説教』の結論であります。つまり、この『山上の説教』の中でイエス・キリストが私たちに問われているのは、「これを聞いて学んで終わるんじゃない。これを実践しなさい。聞いて行なうのと、行なわないのでは、大違いである。それは岩の上に建てた家か、砂の上に建てた家か、それほど違うものだ。」と。皆さんは大枚はたいて砂の上にマイホームを建てたいなんて、思わないと思います。簡単に建ちます。安くて建つかもしれませんが、でも堅実にしっかりとした土台の上に家を建てるならば、多少の揺れでも、どんな暴風雨でも、台風だろうと、竜巻だろうと、それでも耐えうるとするならば、しっかりと土台作りをしたいと、そのために時間をつかったり、そのために労力を払う。そのために犠牲を払うことは、苦ではないし、避けることでもない、理解できると思います。聞いて行なう者でなければならぬわけです。『**主の祈り**』をただ聞いて、済ませて終わるんじゃない。『**主の祈り**』は聞いたならば、行なわなければいけません。行なうということは勿論ただ祈祷文を唱えればよいという意味じゃなくて、祈ったように生きるということです。祈ったように行動せよ、ということです。『**主の祈り**』は、主が教えて下さった祈りですから、100%応えられる祈り、みこころに沿った祈りです。で、『**主の祈り**』を生きるということは、当然のことながら、みこころに**かな**合った歩みをするということになりますから、すべて神に受け入れられる、喜ばれる、神に栄光が帰せられる歩みになります。その『**主の祈り**』の通りに生きるということが、どのようにとらえられるべきかということをも J・I・パッカーの本から最後伝えて終わりたいと思います。

「あなたはイエス・キリストをあなた自身の救い主として信頼し、主を通して神をあなたの神と信じ、すべてのクリスチャンを天の父と呼ぶ神の家族の兄弟姉妹であると認めますか。それが『**主の祈り**』の“天にいます私たちの父よ。”という呼び掛けのところで実践されます。」

“天の父よ。”と呼ぶならば、あなたはイエス・キリストをあなた自身の救い主として信頼し、主を通して神をあなたの神として信じ、すべてのクリスチャンを天の父と呼ぶ神の家族の兄弟姉妹であると認めなければならないということです。そのようにして実践すべきだと。そのように今から聞いて頂きたいと思います。『**主の祈り**』を1節1節頭に思い浮かべながら、J・I・パッカーという人がそのに対して質問します。チャレンジをします。そのように祈っているならば、あなたはこうあるべきだ、こうすべきだということです。で、続く言葉は、

「あなたの人生の主な目的が、たとえどんな犠牲を払ったとしても、あなたの中にまたあなたを通して神の御名をあがめることにありますか。また、御国における神の勝利や神の完全と調和しないすべてのものに終わりが来るのを見ることを望みますか。あなたは御国のために必要ならば、その代理人・器となって神に対してその門を閉じている人々や状況を御国へと導くために労苦しますか。あなたは自分を導く戒めや人生途上に起こる様々な出来事を神のみこころとして喜んで受け入れますか。また、これらが最高に素晴らしいものであるという（信仰による）知識を喜んで受取りますか。神のみこころである命令に直面していながら、言い訳をし、固執しているような事柄があるでしょうか。もしあるならば、あなたはそれをどうするつもりですか。今日の必要を備え、今日の罪を赦し、今日の誘惑から守るために神が働いて下さらないのならば、あなたは自分が失われた者であることを理解し、また知っていますか。神がいつも赦しのあわれみをあなたに示しておられるのですから、誰に対しても決して**な**まらず、憎悪心を抱かず、赦しのあわれみを示すということをも良心の問題として捉えていますか。あなたへの仕打ちのゆえに今まで赦せ

なかった人がいますか。今この瞬間、自分の態度を変えて、その人と正しい関係を回復するために助けてくださるよう主に求めませんか。誘惑に対して目を覚まして祈ることをあなたの習慣としませんか。それをこれからの習慣にしませんか。あなたは心から『主の祈り』を祈っていますか。『主の祈り』本当にあなたの心に入っていますか。あなたが『主の祈り』に対して「アーメン。」と言う時、正直にそうしているでしょうか。神よ、私たちにきよい心をつくり、あなたの聖霊を私から取り去らないで下さい。主よ、私たちにどのように祈るかを教え、どのように生きるかを教えて下さい。イエスの御名によって祈ります。アーメン。」と J・I・パッカーは閉じております。

アーメン、その通りです、その通りになりますように、真に真実です。『主の祈り』がまさにそういうあなたの信仰告白そのものであるならば、アーメンと言って祈って欲しいと思います。この祈りをすべて理解した上であるならば、最後あなたはアーメンと言ってこの祈りを祈ることが出来ますが、理解していないならばアーメンということは勿論出来なんでしょう。賛同できないからです。で、その通りに、祈った通りに生きていないならば、あなたはアーメンと言えないはずであります。祈った通りに生活していないならば、実践しないならば、あなたはアーメンと言ってはいけません。ただの偽善です。アーメンはただの祈りの締めくくりの決まり文句、マジックワードじゃないんです。アーメンは、その通りです、そうなりますように。ですから、私たちはここに書かれていることを正しく理解して、そして正しく祈る必要があります。聞いただけじゃなく、行なう必要があります。祈って済ませるんじゃないで、祈った通りに行動する、生活する、生きる必要があります。で、そのように祈ることも神のみこころですし、そのように生きることも神のみこころである以上、神が必ず手助けして下さいます。自分には祈れそうもない、自分には出来そうにない。だから祈らない、じゃないです。そのためにこそ主はすべてを投げ打って、人となってありとあらゆる試みを受けられて、同情できない方じゃないんです。あなたの弱さも知っています。誘惑も全部心得ています。そして、あなたの失敗も、過ち、ありとあらゆる罪も、過去も何もかも承知の上で全部を引き受けて十字架の上で贖って下さったお方です。その主が、「こう祈りなさい。」と教えて下さっているわけですから、私たちはその主に従って「分かりました。私たちはこう祈ります。あなたに教えられた通りに祈りますし、あなたが命じられたその祈りに従って私は生きたいと願います。」アーメンと言うならば、主が祈れるようにして下さいます。主が祈った通りに生きることが出来るように助けて下さいます。ですから、出来ないからこそ祈るんです。出来ると思っている人はそもそも祈るなんていうこと自体馬鹿げたことだと思って、祈ることすらしないと思いますから。大前提は出来ないから祈るんです。駄目だから祈るんです。まずはへりくだって、謙遜になって、その上で『主の祈り』を間違った意味ではなくて、間違った理解ではなくて、正しい理解の上で祈って頂きたいと思います。

次回、また 6 章 14 節から『山上の説教』の続きを見てまいりたいと思います。『主の祈り』は文脈の中で捉えるべきなので、前後の内容、全部『主の祈り』にも勿論通じています。『主の祈り』を理解する上ではこの文脈が大事であります。ですから、さらに続きを見ることによって『主の祈り』の理解が深まるかと思しますので、また楽しみに続きをお待ち頂きたいと思ひます。